

令和4年8月28日

## 子ども森林インストラクターin 埼玉

### 緑の森博物館コース報告書

天気予報は午前中 11 時ごろまで雨で、後に雨が上がるということでしたので、雨具持参で決行することにしました。やはり朝方から雨がしとしと降り、9 時の集合時点では雨がかなり強くなっていました。それでも、予報を信じて点呼の後、バスに乗り込みました。参加者は小学生 6 名、年長組 1 名、保護者 4 名、スタッフ 4 名（浅井、藤井、小林、佐藤）の合計 15 名でした。バスを降りる頃には小雨がぱらつくぐらいで雨具なしでも大丈夫なようでした。



小手指駅でオリエンテーション



バスを降りて博物館へ出発

博物館事務所入り口で準備体操をして、いざ出発。今回の目的は森、池、畑、田んぼという昔ながらの風景がある場所を選び、そこが私たち人と、どのような繋がりがあるのかを学ぶことでした。コースに入ると、すぐヨシが沢山生えている湿地帯があり、そこは以前田んぼがあった所です。ここら一带は森や池、田んぼ、草原があり、昔活動していた名残がありました。このような風景について次のような説明がありました。「この風景は里山といって、昔から生活の場でした。木を切って木材、マキ、炭を造り、木の落ち葉などを畑の肥料にし、



博物館から里山コースへ

水を溜めて田んぼを作り、稲を収穫してきた場です。ここには植物、動物、菌が食べる、食べられるという関係で循環して自然が守られてきています。人もこのシステムで生きることができます。ですから、ここには他のどこよりも多種多様な生物が生息しています。今、これらが忘れ去られて、田んぼがなくなって家が建ち、道路ができ、土がコンクリートに変わってきました。子供たちも自然から遠く

なり、虫も触ったことがなく、触ることが怖いような状態です。虫を触ってみて初めて自然を知ることができます。」これらは子供達には理解することが難しいと思いましたが、保護者の皆様に知ってもらいたいという思いが込められていたようです。あいにく、雨模様の曇りであったため、トンボ池にトンボは見られず、蝶や鳥などもあまり見られませんでした。所々で、チョッキリが切ったドングリの枝や、紫色のきれいなツリフネソウ、白い小さな花が総状に咲いているヌマトラノオを見ることができました。池を左に曲がると上り坂になり、土が粘土状になっていて滑るのを注意しながら登って行きました。坂を登りきったところに整備された雑木林があり、明るくなっていて下草が沢山生え、木も太く成長していました。ところが、反対側は整備されてなく、木が密集して細くなり、針葉樹が生えてきて暗くなっています。子供たちになぜこのような違いが出て来たのかという説明がありました。明るいのは手入れをしたためで、里山を維持するためには木を切ったり、草を刈ったりする手入れが常に必要なんだということでした。しばらく行くと、非常に明るい雑木林にやってきました。ボランティア団体が行っている萌芽更新の場所です。大きな木を切ると切り株ができます。そうすると、切り株の周囲からいくつかの芽が出てきます。それらを15～20年間隔で伐採し、また、そこから芽が出ての繰り返しで、里山を維持させてきました。子供たちには雑木林ばかりを歩いて疲れ切った様子。そこからずっと坂を下って行くと、草原が出てきます。左に茶畑が広がり、右に稲穂が見えてきます。最後に子供たちに昆虫を観察させる場所にやってきました。



草原からバッタが飛び跳ねる



みんなでバッタを探す



手の上にバッタが止まる



やっとバッタを捕まえた



足を踏み入れるたびに虫が飛び跳ねます。イナゴ、ショウリョウバッタ、トノサマバッタ、エンマコオロギ、シジミチョウなどが飛び跳ね、ずっと昔の里山の姿です。子供たちは網で追いかけていました。沢山の虫を喜び勇んでかごに入れる。それでも、規則で、虫はここに最後は逃がさなければなりません。昼食時間を兼ねて一時間ぐらい駆け回っていました。やはり、子供たちに必要なことは自然に触れることです。それが一番の楽しみで、心にいつまでも残っています。アンケートにはまた来たい、今度はもっとたくさん虫を捕まえたいということでした。また、博物館の中で、昆虫の標本を見て学んだようです。帰りに事務所の人から、逃がした賞として記念の虫のワッペンをもらいました。昼食後、突然のわか雨に遇ったり、子供たちも歩き詰めで疲れた様子でしたが、活動するには程よい気温の一日でした。



博物館内で図鑑を見る



スライドで勉強する



館長さんから逃がした賞を授与



参加した子供たち

(浅井記)